

生きづらさを抱えた若者の社会的包摂に関する社会学的研究：「誰かを頼りながら働く」という新たな自立像の構築

金本, 佑太

<https://hdl.handle.net/2324/7362164>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（人間環境学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 金本 佑太

論 文 名 : 生きづらさを抱えた若者の社会的包摂に関する社会学的研究
—「誰かを頼りながら働く」という新たな自立像の構築—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では若年無業経験者の無業実態、就労支援利用経験、就労達成後の職業生活の展開状況を明らかにした。その一連の過程を、若者が抱える生きづらさの緩和・克服過程として、また社会的包摂の達成過程として位置づけ検討し、「誰かを頼りながら働く」という若者の新たな自立のあり方を示した。

若者の学校から仕事への移行の不安定化は近年、生きづらさという概念から、また社会的排除／包摂アプローチから着目されている。産業構造の変動と経済の低成長化、高学歴化や雇用構造の変動のなかで、学校卒業後の若者にとって安定した移行の達成は容易ではなくなった。さらに移行に困難を抱えた若者は自己責任での困難対処を求められ、この点を若者の生きづらさとして理解することができる。また移行の不安定化は、収入の無さという経済的側面からだけではなく、社会関係の断絶や否定的アイデンティティの形成など複層的な不利として経験されるという、社会的排除の様相を呈している。

これまで、生きづらさは同じ立場の若者や支援者との同質的な関係性のなかで和らいでいくという直線的議論として語られることが多く、また社会的包摂の達成も複層的なアプローチでの対応の必要性が指摘されるにとどまっていた。そのため、若年無業経験者の無業から就労達成、職業生活の展開に至る動態的過程のなかで、一度緩和した生きづらさや支援利用過程で獲得した生きづらさの対処方法がどのような変容をみせるのかを検討する必要がある。また複層的アプローチのなかで実際に社会的包摂がどのように達成されていくのかを検討し、既存の社会的包摂政策の課題と今後の展望を明らかにすることも求められる。これらの点を踏まえ、若者就労支援事業である地域若者サポートステーション（以下、サポステ）事業の利用経験者の事例を検討した。

サポステ事業利用経験者の事例からは、無業による「自己否定的感情へのとらわれ」「将来展望の持ちづらさ」「頼れる相手の不在」という生きづらさの実態が明らかとなった。同時にサポステ利用によって「自己否定的感情の緩和」「将来展望の具体化」「誰かを頼るという認識の獲得」が行われることで生きづらさは緩和していき、また就労達成後も「誰かを頼りながら働く」という、自己責任規範を相対化した職業生活展開のあり方を見出す若者の姿も明らかとなった。支援を利用してもなお経済的自立の達成が容易ではない若者にとって、誰かを頼りながら働くことは、職業生活に慣れていくうえで様々な困難を自己責任で対処しなければならない状況を避けるために重要である。本論文ではこの点を、労働市場における経済的安定を重要視してきた従来型の社会的包摂とは異なる、社会関係的安定を軸にした社会的包摂のあり方として位置づけている。しかし就労達成後の職業生活で何らかの困難に直面した際、実際に支援者を頼ることが難しい事例もみられた。その背景には、若者が仕事に慣れていく過程で、自己責任のもと就労に従事して自立を達成するという「就労自立の論理」が前景化する一方で、支援者との関係性は希薄化していき、誰かを頼りながら問題

に対処するという「支援の場の論理」が後景化せざるを得ない状況があった。

こうした若者の実態から、生きづらさに関する議論、また社会的排除／包摂アプローチに与える重要な示唆が得られている。支援利用によって無業による自己否定的感情は緩和されても、その後の職業生活で仕事に慣れていく過程では、誰も頼らないことを自立として前向きに捉えようとするなど、自己責任規範への再接近がみられている。つまり多面的な生きづらさのうち一側面の緩和を目指す、かえって別側面への再接近が生じてしまうという、生きづらさ緩和のジレンマがある。しかし、生きづらさを抱えているからこそ適切な他者を頼ることが可能になることを踏まえると、一方的に生きづらさの解消を目指すのではなく、自身の多面的な生きづらさと向き合いながら、それに対処するため適切な他者との関係性を構築、維持しながら働いていくことが重要になる。このように「誰かを頼りながら働く」ための出発点として、生きづらさを位置づけることができる。

またこうした若者の事例は、社会的包摂の達成において段階的な把握が必要であることを示している。若者は無業により社会的排除を経験した後、就労達成を目指す過程では、就労を通じた社会参加を自己責任で達成していくべきという考え方を内面化している。これは与えられた包摂への再適応過程であるが、その後支援利用を経て、誰も頼らずに困難に対処するという考え方から脱却し、誰かを頼りながら働くという新たな自立のあり方の重要性を認識する。つまり望ましい社会的包摂の達成においては、従来型の社会的包摂の限界や困難を認識したうえで、適切な他者を頼りながら働くことの重要性を認識し、主体的に選び取っていくことが重要になる。こうした形で社会的包摂の達成における段階的な把握の必要性を指摘し、若者が「誰かを頼りながら働く」ことを容易にするために求められるメゾレベルでの社会的対応を示した点にも本論文の意義がある。

そうして誰かを頼りながら働くことが可能となるよう、サポステ事業は若者にとって頼れる選択肢の一つとなったり、地域社会に若者支援の重要性を問いかけたりするという役割が期待される。また政策的対応として、若者が家族の扶養を受けずとも経済的に安定した生活を送りながら支援を利用できるような所得保障の拡充も検討されなければならない。さらに今後の研究では、無業経験者にとどまらず多様な背景を持つ若者が「誰かを頼りながら働く」ことを新たな自立のあり方として選び取っていける地域社会の環境整備のため、地域社会の側の若者支援に対する認識のあり方や、若者側の支援利用に関する社会意識の把握などが求められる。